



治同

結尾華

下



此所のくおまて  
他戸のまか  
那煙ふ、  
観死  
心  
視脚  
す  
い  
は  
ん  
け  
は

明





江戸の...  
川口...  
所制...  
可

狐狸の

かき

其の

文  
竹  
抄

元禄...  
...  
...  
...

明治六年十月十三日於義仲寺

追善之俳諧

枯も好辰もむのしるさるのし

永機

おあつうのくまをりくを

機一

くまじ板の奎目こまの。おののこ

詢荒

ぬり鞍あけ八馬おまここふ

菟好

みつう三ッ條のひつう山おま

長山

あふののたつもの菊のた所月

静和

従うぬる葛の袴をくも恨

正教

のきうく素おの秋もげこら

操在

ゆー汐のまのる習る岩もむ

桃高

人の命や燭さくのくち

指五

一箇の旅の着れ 膳の上

すん

のきうくわく暗る夕立

吐雪

林畑のあしなつゆのあ

松塙

旅来の道は六庫裏の森こふ

未陽

腫あふの脚をたこくこ

菅笠

仲たのむこよ途はくち

孝節

悲知の月の曇り照りせり

静五

秋風樂を舞あやう

魚流

みのり こもりのまはし

梅甫

早瀬の舟のくさこさ又

笠仙

名をいひ伊賀の山に樹を

衣儀

こすまのしもは紅葉の

流芳

りの花の甲 はなのかのこう

笈舟

はなこころ はなこころ

晴を

利音の市高ひり おひり

木甫

ちのめ佛を ちのめ

英言 ナゴヤ

涼 涼

清江

寒 寒

三曉

聖の金 聖

虎博

抱 抱

抱月

人 人

亀石

松 松

竹籟

梅枝

長廿年

此の宿のまよひのなほ

桂石

増し理のぬらりたる

古拾

額の子の赤をれ八伏理々

佳榮

のつら肩のねむ

斬

墨文

是の長く嘆むししのほ

伯志

藻州の濼のつる

嵐年

細かな鱗羊の指さす

頸窩

甫五

娘ひさしおまの

招雪

白くちす正座すもの

亀悦

小城の似せん大河一ま

賢外

朝月の光を寝る志

木主

あひ重なり

翠雨

韻塞 新酒の酔ふ口拍子

霞流

いつもの所は供を

雨芳

花提え通を

石昔

ひさしの懐乃ち

金外

卯炎のえ花梅の

青芭

垣のとぬら

草谷

三



けしの日れ吊もわれ 寺

金羅

禿もくくん是ゆらまお

紫雲

あと言狸もくくし笑あらん

李霞

宿ハ甚しし年一の月

蓮宇

殿脚は草のみが折れ清し

の笑

帯を輝の角力をしる

世叟

殿やあはれあくちこの歳ひり

鳳儀

赤い氷雪のほめ 竹

吊を

古い木の茶も二かゝりの山

秋香

庵下瓶治のふい金貞之

女 三重

れ多しはめ 草履突りり

何らな理 扇子

茶里に厚あちたさやこ

かき 文義

あつ焼く遠はらものやれなせ

谷山

大舟へこの縁ははなうら

一歩

あつはまたあきしはまのれ

戸本 梧風

機よあけこねよた艶子こし

如竹

搦骨木を薬はあつすうすみ

福所

坂のちいぬらけ六

枝玉

赤根のたこ石塔波のせきと雲

梅幸

まげるとのらうと推し果はし

布川

お月のちりあつむ船を

貞英

吹ぬくぬく雁の羽をよ

貞英

僧正の鼻もつぼの肌をむく

三井

藁のけしらの膝を突つて

水圖

此のあつむくはくはく

流美

おのそぢもくはくはく

三松

若く角むくはくはく

推久

+

+

まのけしらのあつむく吹

種員

鐘のけしらのあつむく吹

貴子

念珠のけしらのあつむく吹

胡吃

後園のけしらのあつむく吹

圓居

まのけしらのあつむく吹

文仙

後園のけしらのあつむく吹

石花

松のけしらのあつむく吹

千雀

まのけしらのあつむく吹

一樹

碓氷のけしらのあつむく吹

櫻知

我先のよめいひのきつらるる  
 起よりこむせいの瘦骨  
 有ゆを指し腕のまろりけり  
 嗚りしゆふりけり  
 嗚りし炭の古所新らん  
 取<sup>ア</sup>守の子子を撫市の成  
 煙五百山をのりて  
 今とまゝいふ川の勢  
 いさやとく酒の大勢言ん

こつ  
 無獨  
 一  
 梅逸  
 貞松  
 清香

手向とく〜国への情  
 青天とく花をいなる情  
 権の木乃間又音むく情

得中  
 梅年  
 其冠

栗津曲途年抄巡杖巻此一卷  
 於義仲寺牌位下端尾

陰曆十月六日法會開闢 導師法明院敬德阿闍梨

あつたーの口かみの権もき木立 流美

あつたーの枯れもきれーのふり 季鏡

あつたーのさあつたーの時雨 指玉

あつたーのさあつたーの時雨 小叟

あつたーのさあつたーの時雨 梅香

あつたーのさあつたーの時雨 園居

晴くち時雨のさあつたーの時雨 支仙

あつたーのさあつたーの時雨 松歌

あつたーのさあつたーの時雨 外陽

あつたーのさあつたーの時雨 松歌

あつたーのさあつたーの時雨 外陽

あつたーのさあつたーの時雨 外陽

卯月

同七日

世々もゆりかぜのそよひけりあけ 梅雨

以日東京のうきさきついでにの三々

わすれなげな陣ふちの時の雨川 機一

庭をひらきあけさるりとの根を 掃 長山

二百の平原のふたのこゝろ 松 松鳩

世を旅するまゝの 古 古 洞 密洞

権のそよよ 麦 麦圃

ぬきぬきと神の 一 一本

茶のむところの 駒 駒雄

栗津より吹かす 丹 丹右

ぬきぬきと 古 古 梅 梅年

初菜より 氷 氷

東京其角堂興り

一帯と 為 為

船の酔 孝 孝節

茶碗の居 煮 煮

明

上

榎臺をのこせし 土間のくそをく 節

鶏のこころの おやこもなし 並

鎌倉のわ所くらへんよ 障の入 も

日蓮のころ 祖師とらとて 甚

とくしも 登とあふくをこハ罪 並

行すも 登のころよふお橋 甚

掃除のあむ 役ハ樂あまの 草

たのめしき 松の老あり 並

荒河と 孤跡くら 月れはわたり 甚

片くし 笑げん 鹿と 篠笛 甚

菌け 味をうとる 香のいもこ 並

漆のあまら ちろのこ 蓮子 甚

夏はと 千おりの 花このりも 甚

あまの ちんをぬも 障の香 並

馬刀 見らるる ぬき 味いし 甚

あまの ちんをぬも 障の香 並

二合 羊れ 聖のころ 宿川の口 甚

ころい 香めら ずぬまし 並

備前の火をうらふ名の立せむ  
 ひろみ吾鶴と言し私の尻  
 雪をふり田代に俵持ゆき  
 河に舟を擧ぐ賽ひらひら  
 極樂の河津に舟を繋ぎて  
 舟に舟を繋ぎて舟を繋ぎて  
 竹すのこし世をたのしむはま  
 舟を繋ぎて舟を繋ぎて  
 舟を繋ぎて舟を繋ぎて

三

凶日としし成の日うまき  
 表替すとしし位在の新らう  
 雨降ると一降すもむら雨  
 花を養育するも二百年  
 種をのむる幸崎り松

草 春 並 意 春 草

墓系 鳥山一雄 翠水

月尾

廿

同八日

日向高鳴る人しあこころと 未陽

時雨をくまへ 羨望 風を羅敷の如 月海

日向の如花をくまへ 羨望の如 百浦

特英 神雀 彩楓 夢堂 系詣

粥わくく 飲精進も冬のはり 泉

同九日 中日向

しるせりしうらなをせの香流又 泉

散るものおあかりの日向の 菊松

ちりあかり扇まけし花の如 春江

すあゆま存日ハハと枯花の如 未だ

花の如くあつたふもの墓より 貞英

降しし色ももくハ 睡やうを 甘 高無

古池やあつた 寂も二百年 死 梅分

日向の如馬の像を志すの如きなり

目先

五



勝もよばぬし——んをいさや日あり 枕あり  
三石の春のし——海いし時雨の日 一閑  
ちつうよまよりのきかりしをわ 雪の  
あそぶ寒し——らるる二百中 静五  
らとらるる栗津の時ありしのを 花中  
居向の面影もふやぬをむ 帆蓮  
五月のけしきをも重なる時雨裏 菟好

哥仙

風り——ら吹るし 母来川 梅年  
のこし——中らうたけらるる 海菜  
燈籠の火やらら本よりのあはれ 花  
三方極の卯方ひら—— 如叟  
者の糸を——ま——を—— 須臾  
く——い——を——撫—— 稻取  
栗稗とれすし賣つる 紅お坊 高陽  
岩のあはれものたる夕 月海  
さるはる華表やらの遠き色 梅金

食おしりして二日寐あゝ。一蛇  
 姉も才費多けのなまなり。一  
 言はふきひも野のちね奇 朴因  
 少蛇をともせらるる夏の日 大昔  
 如しりしまま道してたぬあな 野  
 神送のわらう何やらうたはとを 史  
 州鞋何うかなく焚火誇屑ス 惣  
 ひまのぬれたの葉ののちのわら 美  
 小海志交るり一隅田の白く 苑好

鳴るゆる念仰をまへはるるらん 揚  
 一日曳の節一のちくまて 原山  
 何所らち膝ふ決りかゝるゝ 指一  
 如く降るまきる雪のあつし 指並  
 尺崖を存の木樵のちりまをり 好  
 みをきくゝと京をひけしに 金  
 よひ縁をけし蛇をのふさあはる 而  
 子際のとゆる神の昔む 汝  
 留守らゝゝ木かぬる静なつひ子 山

役日去しぬとめ所りよれ 松嶋

昇る月空の影さるし 龍純と 翁松

たつたうきの鹿のかきりし 並

際前よ丹波の掛もさる仕道 富浦

板一枚の櫛り 大 切 弱雄

わさふたあまの舟もさる 静五

とくひのわたるよさるよ空 在江

暖てお卯日をむの中回向 於

ほろりしとる 扇知の攻突 陽

木曾殿と塚をさるしとるし

あつた舟はのさるしとるし

木曾殿のわさるし 寒よとるし 龍

同十日

花よさるしとるし 蘇しとるし 日 板ぬ

あつた舟はのさるしとるし 櫛り 櫛風

もさるしとるしとるし 櫛り 其冠

お木のはふ五百年 忌とるし 我の石 於

同十一日

大洋面又是下所せらるる夜を  
かげ物り静るる時雨うな  
珠紋のせしすらようにみ扇  
於

於岩代穆如店興り

今も世は降るをせむの時雨うな  
香の志るるよ筒の寒て菊  
子造のうみ鶴りや一向  
かゝるるを水軒もさく  
古仙

後援よむしらの月の阿うくと  
盛山

風向もむらりし砧うけり  
儀

大船のちしるも飛く秋葉も  
仙

是のちしるにや荷造り  
山

二三年伊能の湯柳の心のけ  
後

仲たつあやの縁のちしし  
屋

身代を懐るまのふて  
畊

蓴の味ら酢うけんよ  
仙

そのむらうあそくちせ八まの臺  
山

明

註

吹おとせけりるのせしむ  
 草鞞よ柔もゆる馬の口志あし  
 かのつらゆらこの雁のさき  
 山里と月の用さし白と并  
 ちのくまをこの指の河巻  
 と食おの芝居し其れ口和  
 後りゆゆし犬の叫も  
 身不省なれりる勢うたるし  
 箱よとけくく京院の皿  
 仙 畊 風 儀 山 仙 畊 風 儀

ちるむりお像の持さるひさ  
 ぬふもあ白ふゆりあむら  
 執筆 山

十二日正當

ころの蝶の日向やうらむ 清香  
 時雨忌や松あり磐の二百車 石莖  
 推れとも幻住居の冬木立 湖院  
 りあきむし叫あこの 時雨忌 竹苑  
 ちまうけくろぬりあこの 如牛  
 報恩ししちるるぬりあこの 香石

今も秋寒し 栗津の松り香 沈月  
 一と金魚の行けはるも 旅衣 義水  
 耳合せしめしるの旅の 一と金魚 カキ  
 一と金魚の行けはるも カキ  
 仰ぶるも六峰をたのむ カキ  
 時雨も 山も雪も の 古心 詣 魯人  
 白髪吹焚火の乾やのこし 梅典  
 手もたはる 舟もしる 舟の 舟 舟  
 系拜 西京枳城村方世話人及 義仲寺連中

ぬきそこころいふはの朝 一と金魚 永機  
 ぬきそこの御 志 義仲の院住 乍昔

百韻讀上 満座各焼香

法會中 普音之吟

一と金魚の行けはるも 時雨 川 誦梵音  
 一切経の行けはるも  
 向ふはるも 一と金魚の行けはるも  
 一と金魚の行けはるも

月夜

時雨のちりしるしの里の時雨の日 那由多 宜道

おのちの移る粟津のあまの川 小野 桃高

くさのくさのあまの山乃空出 吉村 不及

此のくさのあまのくさの川 淡本 晋古

藤打野をくさのくさの川 丹 阿比

安名尊流の餘韻二百年 大槻 白念

くさのくさの川 信 白念

くさのくさの川 信 白念

木のくさの音を葉の法の時 信 白念

如是我因くさの枯地のまの川 信 白念

月夜の時雨のくさの川 信 白念

くさの時雨のくさの川 信 白念

くさの時雨のくさの川 信 白念

伊よのくさのくさの川 信 白念

時雨のくさのくさの川 信 白念

あまのくさのくさの川 信 白念

くさのくさのくさの川 信 白念

くさのくさのくさの川 信 白念

月夜

月夜

散もさしりふ得り帰むト六キ 一樹  
 川原の骨戸うらの森 葉 露  
 空の栗津へ送るト一 道 心我  
義忠の 義忠のまゝも左ひト一 今ト一 暮吟  
 まつし道松ぬけしきなる所 子雁  
 我を降りくの時雨か繁葉 鳥 守山  
 枯果このもさすあこの芭蕉の如 一歩  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道

けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道  
 けりけりしト一 今ト一 小もさ所ト一 道

正親向

寒菊やあまをさしりたり艶在母中 雀志  
 え縁のむしりさりの時雨の七 晋江  
 飛加禰のしるをさすふ節を 花儀



こらあひをまじし是より初め、巨石  
その世の由らふと何や、春駕、  
籠坐とふれあふの口や、蓮河  
塚の上西口あふ、新南  
少の世よ、不馬の時雨らよ、雲霧  
枯屋を根ししうあられ、夜夕<sup>死</sup>  
とつあぬのあ、日なると、馬泉  
朝のちやうとあ、神く、尚古  
りなと、ぬらと、く、枯屋を、三民

の、と、作、と、と、と、降、時、雨、一、の、堂  
と、た、う、と、と、と、あ、の、か、就、吟  
あ、の、今、も、あ、と、枯、屋、夜、雪、蕉  
その、影、の、い、ま、あ、の、け、冬、橋、を、甫  
枯、叶、や、その、む、の、道、一、之、落、俗  
こ、ら、只、あ、よ、何、と、枯、屋、を、九、子  
長、舟、を、寂、何、と、し、何、村、は、あ、雅、後  
た、と、と、と、と、と、と、と、と、と、乃、  
い、あ、と、と、二、百、年、一、目、や、帰、と、柳、子<sup>今</sup>

ありしのふりあまをむすべし 清微  
 年をしの降るまじし時雨を 良美  
 昔こそしし 山崎 山崎 山崎  
 初め海雲津の 抱法  
 人並に 快雅  
 あり 碧海  
 初 月郎  
 志 八世  
 吳仙

梅 梅  
 暗 筆  
 あり 桃年  
 世 成志  
 時雨 志保  
 ころ 梵石  
 あり 在雲  
 月真 枕  
 秋 正流

げんやをたれし世の日の白ふ、蒼峰  
 松原の松青をりりたる所、  
 池の岸を染めたり、初時雨、藍を  
 一岸より粟津よりの河原、  
 墳を掃くものたれし世をたれし、松花  
 探るるをげんやの岸、  
 一甫  
 杖笠の舞をりりや初時雨、  
 初時雨、義経の山をたれし、  
 其峰

川音の時雨、  
 松花の舞をりりや初時雨、  
 初時雨、義経の山をたれし、  
 其峰  
 手向ふをむき、  
 居て眺むる時雨、  
 うねる花の山、  
 月をたれし世をたれし、  
 二百中、  
 日影をたれし世をたれし、  
 撫子のむきたりし時雨、

初時雨ころり粟津よまらさく  
 一ちと書り我もささくの枝 蓮字  
 音ささくまらさく ねのね 汲古  
 け道の果行度 一まはる花、一多  
 りのささくささく西へささく、杜を  
 向新しくまらさく ね 枯花む 墨文  
 けささく枯し芭蕉の歌ささく 女 花唐  
 閑より入道ささくのちささく氏めぬ 有芝  
 初しくささくささく色をささく 花を

枯れ今ささくの世のねを吹まらさく 招音  
 え福よ迎ささく水ささくのり川、 若文  
 枯しこささく花むささくの名もささく 音散  
 成むささくささくささく 枯花む 寄書  
 影ささくささくささくささくささく、 一の同  
 ささくささくささくささくささく、 社果  
 ささくささくささくささくささく、 若素  
 枯ささくささくささくささく、 枯手  
 ささくささくささくささくささく、 迎書

竹葉のたをうくく 二言草の  
あし 秋のま

そのまをたをうくく 竹葉のた 耕雨

飛雪のまをうくく 大坂 臨雨

いづれもたをうくく 信濃 雨足

湖のたをうくく 仙台 雨足

所く力あつたをうくく 是南

外の花をうくく 信濃 雨足

筆とてたをうくく 有秋

清くし昔もくく 雨足

むきのをうくく 知石

枝まうくく 友交

影のまをうくく 秋重

因幡のまをうくく 秋重

鳥けりまをうくく 吟風

日本中おりまをうくく 十樹

枝まをうくく 遊人

雪のまをうくく 江尾

山の井も秋のまをうくく 青蓮

あつちの記念をみるわ 言 羊山  
 ちんちん送るわ 杜 杜若  
 舞 羽 羽阿  
 雲津の枯るん 三 三百年  
 ねん 曲 曲歌  
 せいの 口 口  
 湖 曲 曲川  
 ころ 移 移取  
 暮 九 九峰

け 柳 柳花  
 時雨 上 上  
 時雨 木 木  
 松 江 江  
 水 三 三

際々のもろびと枯庭に花  
あけのこけのきく 石のつぼみ 万葉

夜仲のよきはるめく

げのこけのよきはるめく  
月や森や花の上のよきはるめく  
つゝあつと法のあつと二百年 上ナ 播磨  
あつとちとせとせとあつとあつと上ナ 晋保  
とつとつとあつとあつとあつとあつとあつと  
叶あつとあつとあつとあつとあつとあつと 宿題

とつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
降音のあつとあつとあつとあつとあつとあつと 好日  
霧裏のあつとあつとあつとあつとあつとあつと 宝樹  
初るの大つとあつとの二つとあつと 綾北  
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと 素木  
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと 木綿  
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと 小文  
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと 柳唯  
二百年やあつとあつとあつとあつとあつとあつと 古 小裁  
時雨ト

二十三年十月十二日

於岡口芭蕉堂書

一とあつるよりむね  
 ぬれなきしゆいへ  
 けあつるねりし時雨をよひ日  
 けあつる水音  
 権の木は流るる川  
 舟のりまゝ  
 青山  
 素水  
 其風  
 枕高  
 素石  
 松外  
 舟

舟軸のりし中  
 招き手の木  
 栗の穂  
 舟のり  
 馬舟  
 羽織  
 靴  
 元禄七年仲秋



二十五年 伊賀國柘植の里  
建碑のお

月夜をませしけの佛も  
くぬの山乃時雨の里  
か濱の魚の尾掬のり  
色い蔭く徳信止り  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま

くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま  
くまの松の葉のま

竹まき垣の縁に  
 木まの竹の梢の枝の  
 乾衣も回氣り  
 流の御(罌)の瓶を  
 致の末社も又負の  
 一通り書を満せし  
 十字は切し履氏を  
 了持の墨六か  
 端度けこと草の細

迄 於 迄 於 迄 於 迄 於 迄

空雲を透通る日  
 婚礼の前の  
 のしそく  
 紅入り  
 声細  
 西  
 戸一  
 者  
 是光

迄 於 迄 於 迄 於 迄 於 迄 於 迄

いぬらふを詠うらる原の  
 枯尾集少くは死の時を  
 昔の詠ひ春いづる  
 於 途 此

羽根枯尾集少くは死の時を  
 詠うらる原の  
 枯尾集少くは死の時を  
 昔の詠ひ春いづる  
 於 途 此

一筆の端々へし 普音の歌をよ  
 めしよ 擧し存の所へんか  
 碧晶より一機一境一言一句は  
 此集の成る所なり 紡糸を  
 古村屋たの所よりその形を六中  
 新に復たなり 唯 普音の文

手前知つて 是は換心と  
 形はた元祿俳茶の各あり  
 いふとあはれ道をもて我とし 道の  
 正し 此をすしとて一歩なるを  
 そのふたは道なり 一機一境  
 又さくまへは しく 茲芭蕉

伊勢の一例に於てあるべきもの  
跋も亦くいふべきものなり

國富梅逸

伊勢の一例に於てあるべきもの

鈴木美都留刀

明治廿六年十月  
全 年十一月

日印刷  
日發行

定價金六拾五錢

編輯兼  
發行人

晋 永 機

同市日本橋區本町三丁目八番地

大賣捌所

博 文 館

同市神田區表神保町三番地

同 東 京 堂

